



Title	第7回東アジア科学技術社会論会議 見聞録
Author(s)	岡橋, 毅; OKAHASHI, Takeshi
Citation	科学技術コミュニケーション, 1, 125-129
Issue Date	2007-03
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/17547">https://doi.org/10.14943/17547</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/18951">https://hdl.handle.net/2115/18951</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC-125-129.pdf



報告

## 第7回東アジア科学技術社会論会議 見聞録

岡橋 毅

A Report on the 7th East Asian Science, Technology and Society Conference

OKAHASHI Takeshi

Keywords: STS, East Asia, science communication

### 1. 東アジア科学技術社会論会議

さる2007年1月14日～16日の3日間、神戸と大阪で行われた第7回東アジア科学技術社会論会議に参加した。全体テーマは、「キャッチアップとその後：東アジアの科学技術の歴史から、21世紀への展望へ」であった。東アジア科学技術社会論会議とは、東アジアの科学技術社会論研究者のネットワークのことで、先行するヨーロッパのEASST (The European Association for the Study of Science and Technology) や北米の4S (Society for Social Studies of Science) の東アジア版をめざし、2000年から定期的に行われている会議のことである<sup>1)</sup>。今回は、日本、中国、韓国、台湾などから約60名の参加があった。

私は、自らが関わる科学技術コミュニケーター養成ユニットの活動内容を発表することを兼ねて参加させていただいた。今回は初めての参加だったが、多くの発表を聞き、各国の研究者と交流を深めることができた。ここでは、少々脱線も含めつつ会議の私的見聞録を記させていただく。

### 2. 神戸にて

初日と二日目は、神戸大学で行われた。最寄りの六甲駅からタクシーに乗り、神戸大学へ向かった<sup>2)</sup>。いくつかのキャンパスを通り過ぎ、神戸大学の広がりや地形的複雑さに驚かされる。会場の神戸大学百年記念館は、神戸大学の前身である神戸高等商業学校の開学(1902年)から数えて百年を記念に建てられた、これも威風堂々とした建造物であった。エントランスに設けられた大型バルコニーからは、神戸の街と大阪湾が一望でき、当日が晴れていたこともあって、海面に陽光がきらめくその景色の美しさに目を奪われた。私はなんだか圧倒されっぱなしであったが、既に到着している参加者の皆さんの幾人か(特に喫煙愛好者の皆さん)は、階段状になっているバルコニーですでに旧交を温めている様子であった。うらかな神戸の町並みを借景としてたちのぼる煙草の煙を横に見つつ、会場に入り受付を済ます。会場となっているホールも建物と展望に並び、洗練されていた。円形状のホールは、その大きさに比して肉声が通りやすい音響で、照明の具合も落ち着きがあり、ある種の一体感を与えるような設計であった。このままでは神戸大学見聞録になってしまうので、そろそろ会議の中身に入っていくことにしよう。

### 3. さまざまな発表

科学技術社会論は、もともとさまざまな分野をまたぐ分野横断的な学問領域である。STSを「科

---

2007年2月9日受付 2007年2月14日受理  
北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット  
連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

学技術論」(Science, Technology Studies)と解釈するか、それとも「科学、技術と社会」(Science, Technology, and Society)と解釈するのか、という議論もあるぐらい多様性を認めるフィールドである。STSとは何かという問題は、ここでの主題ではないので深入りしないが、今回の会議もSTSの多様性を示すように、科学史的なものから哲学的なもの、はたまた現代的な科学技術と社会の問題や教育実践の報告まで、多岐にわたるものであった。そのなかから、いくつか私の印象に残った発表を紹介する。

### 3.1. 科学技術と歴史

歴史的なテーマは、この会議でこそ発表されるべきものが多かった。それは、ある国における問題であっても、文化の伝播・変容や帝国主義など、隣国の問題や東アジア全体の問題である場合が多いからだ。例えば、神戸大学の財城氏と塚原氏の発表では、日本の植民地下であった台湾における日本人科学者による気象学をテーマとし、当時の研究内容が帝国主義の文脈の上で分析できることを示した。また、早稲田大学の加藤氏からは、漢方医学に対するイメージ、例えば西洋医学に対して優れているというような見方が広まったのは、西洋列強に対抗しながら植民地化を進めていった日本の帝国主義の影響があるという発表がなされた。この発表のときには、国による漢方医学や中国医学の捉え方の違いについて中国や台湾の研究者との意見交換がなされた（その場で結論がでたわけではなかったが、興味深いやりとりであった）。

東アジア的なテーマとならずとも、各国内での比較的最近に起きた事象についても興味深いテーマが多かった。例えば、ソウル大学のSungook Hong教授から、the National Educational Information System (NEIS)という、国による教育情報の一括管理についての国民的議論とその後の経緯についての発表があったが、情報化が進むどの国でも同じような問題を抱えているだろう。同じく、ソウル大学のDong-oh PARK氏は、ハングル文字のコードについてふたつの対立する規格があり、その論争史を論じていた。また、東京大学の田中舞氏は、日本の科学映画の歩みを詳しく紹介していた。日本の科学映画は、これまで広くは知られていなかったテーマであり、科学技術の文化的な側面は、これからもっと研究されていくべきだと感じた。そして、国立台湾大学のYi-Pin Lin氏からは、台湾の工場における土壌汚染の調査において、女性と水との関係(例えば、家事をより多くする)が見落とされてきたために、明らかにならなかった健康被害についての報告があった。この事例は、フェミニズムの視点によって、今まで見えてこなかった問題が明らかになる好例であった。

### 3.2. 現在進行形の科学技術と社会

新しい科学技術の発展や現在進行形の科学技術と社会の境界における問題などを取り上げた発表も多かった。日本の例としては、東京大学の寿楽氏が、風力発電の立地に関して、地元住民の反対が高まりつつある状況を原子力発電との比較で論じた。風力発電にもNIMBY (私の裏庭ではやめてほしい)問題が見受けられるという話は、ある意味新鮮であった。中国の例としては、中国のNortheastern大学のChen Fan氏とMa Huiduan氏より、北東地方において技術者が不足している問題についての分析があった。韓国の例としては、Hanang大学のSang-Wook Yi氏から、「ナノ・シルバー洗濯機」についてその文化的・政治的な分析がなされた。ナノテクノロジーに関する情報や製品はこれから増える予想されるという話もあり、示唆的な事例であった。また、Kookmin大学(韓国)のHwan-Suk Kim氏は、韓国だけでなく、世界的にも議論をよんだ研究捏造事件である'the Hwang affair'について、単なる個人的な研究の不正としてみるのではなく、文化的・政治的な要素、社会的文脈を意識した分析の有効性を主張していた。ソウル大学のLee Young Mi氏からは、IPL (Intense Pulsed Light)といわれる美容のための治療技術の利用のされ方やイメージが治療者や被治療者、あ

るいはメディアのなかで変容していく様子が論じられた。発表後に話したところ、日本の美容技術の話に高い関心をもっていた。こうした場で共同研究などが生まれたりおもしろいと思った。

このように、東アジア科学技術社会論会議での発表は、テーマも時代も分析方法もさまざまなものであったが、どれもユニークで興味深いものであった。科学技術というと、科学技術研究そのものをどのように進めていくのかという話になりがちであるが、時々、少し後ろに立ってより客観的に科学技術を見つめることで、みえてくるものもあるようだ。

#### 4. 発表前日

さて、いよいよ私の発表について話をするにすることにする。発表内容は、北海道大学の科学技術コミュニケーション養成ユニット(以下、CoSTEPと略す)の授業や実習についてである。教育プログラムの内容を話すだけなので、難しいわけではない。しかし、聞き手がSTS研究者だけに少々気を使う。彼らは穏やかそうに見えて、実は批判力に長けた人たちばかりだ。発表後の「質疑応答」に備えるために、2日目の夜は早々にホテルに引き上げて、最後の準備をした。

その時に改めて読んだ論文が、ターニー(Turney)が1994年に書いた"Teaching science communication: Courses, curricula, theory and practice"という論文だ。あまり期待せずに読み始めたのだが、科学コミュニケーション教育を大まかに分類していたところが、私のCoSTEPでの経験をふりかえるのに役立つことに気づいた。彼によると、科学コミュニケーション教育は三つぐらいに分けて考えられる。一つめは、コミュニケーション・スキルに特化したコースで、コミュニケーションの実践経験を重視するものである。二つめは、スキルに加えて、科学技術と社会の間にかかる問題の事例や科学技術を分析するときの理論を学ぶタイプのコース。そして、三つめが、これまでの大学での科学教育の体系なかに科学コミュニケーションの要素を持った授業を組み込むものである。私なりに大まかにまとめてしまえば、科学コミュニケーション教育には、「ジャーナリスト型」、「STS型」、そして「教養型」の3つがあると考えられる。ターニーは、約10年前にイギリスで科学コミュニケーションの教育プログラムがいくつも立ち上がりつつあったときに、このように異なった方向性を持つコースが混在していることを整理していたのだが、この3つの考え方は、CoSTEPの教育プログラムにもブレンドされている。CoSTEPの教育実践とSTSとの関係性を問われた時は、この分類を使って上手く説明できるかもしれない、と少々精神安定剤を得て、私は予定よりも早く眠りについた。

#### 5. 発表当日

東アジア科学技術社会論会議の3日目の会場は、大阪大学の中ノ島センターであった。私の発表は、「東アジアの科学コミュニケーション」というセッションのなかのひとつで、私のほかには台湾の女性労働者の健康についての発表、台湾のBSE問題の発表、サイエンス・カフェについての発表があった。セッションのはじめに、セッション・リーダーである阪大コミュニケーションデザイン・センターの平川氏が、日本の科学コミュニケーション教育の概要について、日本で大学院向けの科学コミュニケーションが盛んになりつつあることや、阪大や東大、早稲田などでプログラムが立ち上がりつつあること、北大はなかでもアクティブな教育活動をしているところだという紹介をしてくれた。私の持ち時間は、20分という短い発表だったので、発表の背景となる話を最初にさせていただき大変助かった。

発表では、CoSTEPの理念(1. 双方向的コミュニケーション、2. 地域に根ざした、3. 実践を重視した教育)や授業の仕組み(講義、演習、実習の三つ巴)を簡単に説明したあと、ラジオ番組の制作やウェブコンテンツの制作、広報媒体の制作、サイエンス・カフェの制作などについて写真を交えつつ紹介した。

そのあとが、発表者にとっていちばん怖い「質疑応答」の時間だ。最初の質問は、中国の研究者か

ら私が発表中に引用した「科学技術白書」についてだったのだが、その件に関しては私よりも詳しいセッション・リーダーの平川氏や東工大の中島氏がそれぞれ答えてくださった。そして、次の質問は、予想通りやや厳しめのものがきた。それは、CoSTEPの活動はとても面白そうだが、「キュートで楽しい欠如モデル」なのではないか。これまでの「欠如モデル」とどう違うのか具体例を示してほしい、というものであった。そこで私は、すかさずサイエンス・カフェで対話の演出に工夫を凝らしていること、キュートで楽しいチラシを作るためには深い理解力が必要なこと、ラジオ番組づくりで研究者もコミュニケーション・スキルが試されている話、などを例に挙げて応答する…ことができればよかったのだが、そこまで機転がきかず、「つまらない活動をするよりもおもしろい活動をしていったほうが良い」とやや取り繕ったような回答をしてしまった。せっかく良い質問をしていたのに、上手く答えられず、いまだに後悔が残る。そして、最後の質問は私が発表のなかで少しふれた教科書についてだった<sup>3)</sup>。私たちがつくる教科書は理論編と実践編に分けて作りつつあることなど、いま進んでいる状況を伝えた。発表後にも直接話しに来てくれる方がおり、CoSTEPの教育に少なくない関心があると感じられた。

## 6. ま と め

東アジア科学技術社会論会議に参加して私のなかで意識の変化がふたつあった。まず、なによりも東アジアの隣国がより近くなった。これまでも、東アジアの隣国に友人がいなかったわけではないが、科学技術について議論できる友人ができたことは大きな収穫だった。特に韓国の若い研究者・学生のパワフルさは印象に残った。韓国から日本に訪れていた学生の多くが発表していたこともさることながら、発表後の懇親会で彼らと話していても、研究に対する熱心さが伝わってくるようであった。隣国の優秀な若手研究者とつながりができたのも、先輩方がこれまで培ってきた積み重ねのおかげである<sup>4)</sup>。この会議がさらに発展し、科学技術と社会の課題に関わる研究者や実務家が定期的に集まり、国境を越えた交流が盛んになる意義は大きい。

もうひとつ、科学技術コミュニケーションと科学技術社会論のつなぎ目をどう考えるのかということが、今後ますます重要になってくると感じた。科学技術コミュニケーションは、どちらかというのと学問的な分析よりも、科学技術の情報をメディアにあわせて加工し発信する実践的な活動を指すことが多い。しかし、だからといって、科学技術社会論と科学技術コミュニケーションが別ものであるというわけではない。双方が抱える問題意識や目ざすところは、重なることが多いはずだ。東アジア科学技術社会論会議のようなプラットフォームを通じて、学問としての科学技術社会論と実践としての科学技術コミュニケーションの交流が深まっていくべきかもしれない。しかし、そもそも科学技術社会論と科学技術コミュニケーションは相補的な存在なのであろうか、という疑問も残る。今後も、より注意深く、両方の理論と実践について考えていく必要があるようだ。

最後に、東アジア科学技術者社会論会議の準備に奔走してくださった神戸大学、大阪大学の先生方、手伝ってくださった学生の方々に感謝して拙文の跋としたい。この報告が、東アジア科学技術社会論会議の今後の発展にわずかばかりでも寄与できれば幸いである。

## 注

- 1) この会議はまだ歴史が浅く、公式の組織やホームページを持っていない。今回の会議でも、最終日に、公式な組織の設立やメーリングリストの開設など、今後の発展について話し合いがもたれた。関連情報としては、台湾をベースとする国際ジャーナル East Asian Science, Technology and Society (EASTS) が2007年9月の創刊へむけて準備が進んでいる。今回の会議に参加していた研究者の多くが編集に関わっている。 <http://sts.nthu.edu.tw/easts/>.

- 2) 実は、六甲駅の立ち食いそば屋の隣に今回のEASTSに参加すると思われる中国研究者と同席したのだが、タクシーと一緒にいかがと声を掛けることができなかった(後で彼らが参加者であることも判明)。
- 3) この質問者(おそらく台湾の研究者)のコメントのなかで興味深かったのが、学生が改訂していけるような教科書になるのかと聞いていたことだ。双方向的な科学技術コミュニケーションの教科書として、「学生が改訂していく教科書」は、新しいコンセプトになりうるかもしれない。
- 4) もし再び会議に参加する機会が再びあったら、最寄りの駅で隣国の研究者に鉢合わせても、声をかけられるはずだ。

●文献：

Turney, J. 1994: "Teaching science communication: Courses, curricula, theory and practice," *Public Understanding of Science*, 3(4), 435-43